

桜船会だより

三菱電機大船地区定年退職者の会

第 28 号

発行日 2013.11.16

発行者 桜船会

発行責任者 萩原大義



春の行事：横須賀軍港めぐりと戦艦「三笠」の見学 撮影・編集班

- ・春の屋外行事<横須賀軍港めぐりと戦艦「三笠」の見学> 福田 一進
- ・平成 23 年度「秋の懇親会」 藤本 孝信
- ・王様と握手した話 峯尾 実
- ・いきいきライフ<続「再び青春時代」> 武田 輝明
- ・いきいきラ<トワイライトエクスプレスの旅> 玉田 幸吉
- ・平成 24 年度 桜船会行事予定
- ・事務局だより・編集後記

春の屋外行事「横須賀軍港めぐりと戦艦三笠の見学」

福田一進

3月9日(金)は冷たい小雨が降るJR横須賀駅改札口前に10時20分に集合。64名参加者確認後、駅を出ると、横須賀本港が目の前に広がります。横須賀本港とヴェルーニ公園沿いを徒歩10分程で「軍港めぐり」乗船乗り場「汐入棧橋」に着く。棧橋の近くで雨を凌ぎながら、会長挨拶の後に「Sea friend V」に乗船。

2008年9月から定期就航した「軍港めぐり」は横須賀本港に停泊する米海軍や長浦湾港に停泊する海上自衛隊の艦船が間近で見られます。海上自衛隊の艦船には艦名と艦船番号が記されています。例えば「123」のように三桁の番号は主力の戦闘艦船を表し「1234」のように4桁の番号は海底探索や潜水艦救助をするなどの支援艦(南極観測船:白瀬も含む)だそうです。

この日の「軍港めぐり」は雨で甲板には行けず、船室からの視界は悪く、窓ガラスに水滴が付き写真撮影もままならいところでした。しかし、ガイドさんの説明は洒落の利いた話術で興味を盛り上げてくれました。大きさをビックリは全長333mの空母ジョージワシントンで、灰色の景色のなかに浮かぶ艦影ですが十分迫力がありました。何隻かの木造艦船も印象的で横須賀本港からスタートし、横須賀港、長浦湾、長浦港、新井掘割水路(横須賀港と長浦港を結ぶ幅約27mの人工水路)と約50分の「軍港めぐり」を終え下船。次のポイントは「どぶ板通り」と「海軍カレー」です。「ダイエー、ショパズプラザ横須賀」脇から歩道橋を渡り、横須賀芸術劇場側の階段を下ると汐入棧橋から5~6分で「DOBUITA SREET」と記された碑に出会います。



「どぶ板通り」と呼ばれるようになったのは大正時代で、昔この通りには「どぶ川」が流れており、

その上に分厚い板が敷いてあったので、こう呼ばれるようになったそうです。

「どぶ板通り」と言えば「スカジャン」が有名で横須賀に駐留していた米兵が持参したパラシュート生地(サテン)でつくられたのが始まりです。米兵が記念の土産とするためか、日本的な絵柄などの刺繍が施されているのが特徴で、日本の若者の間でも流行したファッションアイテムでした。

「スカジャン」発祥の横須賀「どぶ板通り」はその名前がイメージさせる「汚さ」や「猥雑」なものではなく、お店に並ぶ商品の一部に基地の街であったことが見て取れる程度で、きれいな「通り」に一新されています。現在では「ネイビーバーガー」が有名で、毎週金曜日は「カレーの日」などと「町おこし」が盛んです。ちなみに、商店街は水曜が定休日です。

最後のポイントは記念艦「三笠」で、「どぶ板通り」からは約10分の海縁に艦首を皇居に向けて固定されています。明治35年(1902年)イギリスで建造された戦艦で、日露戦争では東郷平八郎司令長官が乗艦する連合艦隊の旗艦として活躍しました。日本海海戦の話は割愛しますが、大正12年(1923年)に退役し、大正15年に記念艦として横須賀に保存されましたが、昭和36年(1961年)に復元されて今日に至ります。

「三笠」の見学は、中甲板にある講堂で<記念艦「三笠」語り継ぐ想い>のビデオ観賞した後は自由見学でした。配布された案内図をもとに、展示品を見てまわり、時にガイドの熱弁に聞きいってしまいました。もっと説明を聞きたかったので次回またお会いできますことを楽しみにしております。

青木 功	木村 允紀	田辺 浩二	堀内 清美	譲原 長治
青木 尚	郷原 重雄	玉田 幸吉	堀場 充	米倉 五郎
秋沢 昇	古宮 龍夫	角田 三郎	丸屋 完	米倉 常男
安達 隼三	斉藤 淳	富山 勝巳	水野 克彦	米倉 英子*
石井 茂	桜井 貫智	中野 嘉博	宮崎 賢治	向山みどり*
市川 洋子	桜井 啓子*	西 孝夫	村木 勢子	向山 夏季*
上原 武雄	佐藤 秋雄	根本 庄作	森 義昭	蓬田 規
大内 朋子	佐藤 菊男	根本智恵子*	森田 茂	若林 正雄
奥野 佳子	佐藤満智子*	萩原 大義	矢沢 寿美	若林美枝子*
小倉 基一	澤野 德行	橋本 秀	矢田 雅敏	海野 伸子*
柏木 博	篠崎 幸雄	橋本 勉	矢田フクエ*	
木村 育男	春原 猛	福田 一進	矢地富士雄	
	宗田 修幸	福山 敬二	山崎 斉	
	竹内 秀義	藤本 孝信	山下 雅子	

参加者 64 名 (敬称略) *は会員の家

平成 23 年度「秋の懇親会」

藤本孝信

平成 23 年度秋期懇親会は 11 月 26 (土) 12 時より情報総研事務厚生棟の食堂で開催されました。

秋の懇親会は、飲んで食べて話に花を咲かせて久しぶりに旧交を温めて盛り上がるという、いたってシンプルな形式です。

「ふるさとの訛りなつかし駐車場の・・・」と啄木は「なつかしき」をうたっております。

例年、懇親会は、春の総会后と秋に開催されて

います。会員の皆さまにとっても「良き停車場」と思われます。職場は違っても、楽しい話を耳にして、懐かしさがこみ上げてきます。

なお、まだ一度も参加されていない会員の皆さまには、特別な椅子ではありませんが、楽しい椅子が待っています。次の懇親会には、「停車場」にお立ち寄りください、お待ちしております。

懇親会出席者（敬称略）68 名の皆さまは以下のとおりです。

青木功 赤垣和夫 安達隼三 有村洋海 安西良矩 池田秀行 石井茂 石井孝 伊藤興志夫 伊藤善貞 井上浅次郎 井原 芳之上原武雄 内田稔 大須賀道孝 岡田光生 小倉基一 柏木博 加藤幸男 川村利正 木村育雄 黒川勲夫 郷原重雄 小和口三郎 斉藤淳 坂本勝彦 桜井貫智 桜木章恵 佐藤菊男 澤野德行 篠崎幸男 島憲一 清水正次 鈴木明美 鈴木豊 春原猛 宗田修幸 高橋長一郎 高橋久幸 竹内秀義 田辺浩二 玉田幸吉 中條光夫 角田三郎 角田清八 富山勝巳 永井頼光 中野嘉博 根本正作 萩原大義 橋本秀 福田一進 福本行宏 福山敬二 藤本孝信 堀内清美 堀場充 前崎博務 正木欣一 丸山健一 丸屋完 水野克彦 水戸部武士 武藤正 森義昭 矢田雅敏 矢地富士雄 米倉五郎

休日にもかかわらずご支援いただいた情報総研や MD ライフの皆さまに感謝いたします。



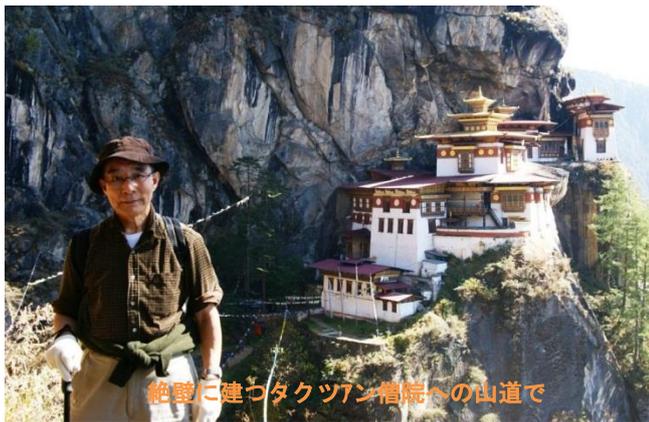
王様と握手した話

峯尾 実

昨年 11 月に、ブータンのジグメ・ケサル・ナムゲル・ワンチュク国王が新婚のジェツン・ペマ王妃と共に来日されました。親日家の国王は、先の東日本大震災直後に国としての追悼式を行い、個人としても 100 万ドルの義捐金を寄せられ、来日の際には被災地を見舞うなど、その人柄からも好感をもって迎えられ、改めて日本人のブータンへの関心と呼び覚ましました。31 歳の国王は、2008 年 11 月 6 日に即位式を行いました。小生は、この直後の 11 月下旬にブータンにツアー旅行した際、国王と言葉を交わし、握手するという僥倖に恵まれました。

ヒマラヤの南にある小さな国ブータン。「世界で一番幸福な国」といわれています。この国の目指すのは GNP(国民総生産)の拡大ではありません。国民幸福度 (GNH: Gross National Happiness) を国の進歩と発展を計る尺度とするという大変ユニークな政治理念を掲げる、若く聡明な王を戴く立憲君主国です。国民の 97% が幸せを感じているとか。

ブータンの国土面積は九州の約 1.04 倍 38,400 平方 km、人口約 70 万人といわれます。首都はティンプルーで、人口は約 7 万人、チベット系の人が多いので、日本人と似た顔が多く、特に若い女性には、日本に来て人の中に紛れ込んでしまえば、ブータン人とはわからないような人が多く見かけられました。

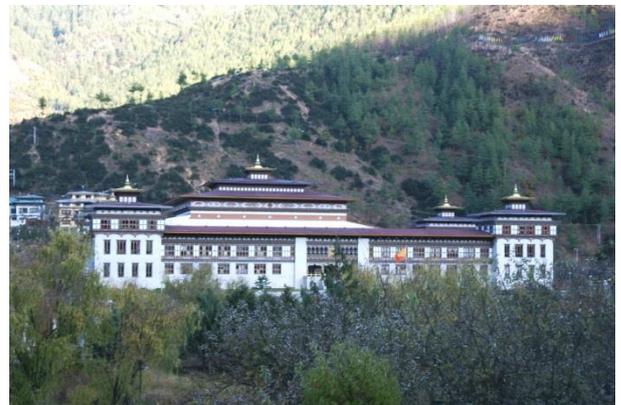


絶壁に建つタクツァン僧院への山道で

宗教は国教であるチベット仏教で、まさに生活と一体化しています。発展途上国といわれる多くの国が近代化を目指すなか、ブータンは「抑制された近代化の道」をとろうとしていると言われますが、その一つが、民族の伝統を重んじることです。たとえば、公式の場では、男性は日本のどてらに似た「ゴ」、女性は「キラ」という民族衣装を着ることが義務付けられています。また、建築は伝統的な様式を守る

よう法的な規制があり、「近代的な」ビルディングはまったくありません。しかし、これは近代化を排除しているわけではなく、街に行く若者は携帯電話を使い、ネットカフェでインターネットを駆使し、テレビで外国のニュースを見ている。なお、ブータンでは、小学校から授業は英語で行います (1960 年代後半に採り入れられたとか)。旅の途中で見学した私立小学校では、丁度 1 年生がディズニーの白雪姫の英語版ビデオを楽しんでいました。

前置きが長くなりました。いよいよ王様との遭遇です。首都ティンプルーにタシチョ・ゾンというブータンの政治と宗教の中心となる建物があります。ここはブータン仏教の総本山であり、国王の執務する政治の中心の場所でもあります。午後 4 時から 5 時まで、時間を限って見学できるとのことで出かけました。さすが国王の居られるところだけあって、入口ではバッグの中まで調べるといふ厳重なチェックがありました。寺院は奥の部分にあり、そこには王の執務場所の近くを通って行くのですが、王の執務中は建物にカメラを向けてはいけないとの規制がありました。



タシチョ・ゾン

寺院では、ベテランの現地ツアーガイドも初めて見るという宗教行事の、副僧正以下数十人のパレードに出会うという幸運に恵まれました。観光客我々の他には欧米人が数人居ただけでした。5 時近くになり出口に向かって帰りかけました。ガイドが国王の執務する建物の守衛に写真を撮ってもよいかと聞いたところ、もうよいとのことで、王様は帰られたのだと思いました。一行のうち小生を含む 10 人ばかりは先を歩き、ガイドや家内ほか残りの数人は 30m ほど後ろを歩いて出口に向かいました。出口近くになったとき、門の守衛から早く出よと急がされ、何か



副僧正のパレード

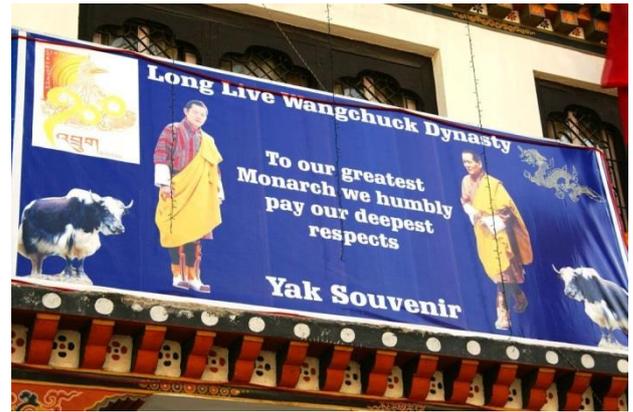
と思って振り返ったところ、後ろから王様がお付きの数名と、こちらへ向かって歩いてこられるところでした。遅れていた家内たちは、国王一行の通り過ぎるのを待とうと道の端に寄りました。

我々先行組は、外へ出て低い柵越しにその様子を見ていたのですが、国王はそのまま通り過ぎることなく、道端の家内たちのところに寄って行って何か声をかけ、握手までするではありませんか。先行組はこれを見て、もっとゆっくり歩けばよかったと悔やんだことでした。といいますのは、王の住居は、我々のいる入口から10m位手前で横道へ入っていったところにあり、王様は当然その道を行かれるものと思ったからです。ところが、王様はその横道に入らず、わざわざ我々のところに来てくれたのです。そして一人一人に声をかけ、握手してくれました。小生には“Nice to meet you”でした。また他の人には“I’m very glad to…”とも言っていたようです。とっさのことで、どう反応したらよいのか、ろくに言葉も出ませんでした。”It is a great honor……“というのが精一杯でした。ツアーメンバーに若い女性がいましたが、若くてハンサムな王様との握手に感激し「今日は手が洗えない」と言っていました。

この王様は、第5代で、2006年12月に父から譲位されて国王となりましたが、ブータンでは特別の意味を持つ星占いの結果、即位式はこの旅行の直前である2008年11月6日に行われたばかりです。父王のハンサム振りも有名でしたが、この王様も長身、オックスフォードで政治学修士号を取った優れた才能の持ち主です。以前タイを訪問したときには、タイ女性の間で大人気となり、あるタイの新聞社が「理想の男性」とはやしたてたそうです。

国王の写真は街の至るところで見受けられまし、一般家庭にも敬愛の対象として飾られています。我々とわざわざ握手をしてくれたのは、飾らない気さくな人柄によるものかもしれませんが、そればかりではないように思われます。我々を日本人と認めたから

ではないかと考えられるのです。



街で見た国王親子を称える看板

ブータンの農業に革命的な変革をもたらした日本人がいました。農業技術者の西岡京治氏は、それまで鎖国を続けていたブータンが国を開いた直後の1964年に、コロンボ計画の専門家として派遣され、以来28年間に亘ってブータン農業の発展に尽くしました。

以前西岡氏夫人から話を聴く機会がありましたが、夫と共に現地に入った翌日から早速、生活に必要な物をどうして得たらよいか困ったとのことでした。貨幣経済が発達せず、自給自足又は物々交換が中心の時代だったからでした。西岡氏は、僅かの貧弱なものしかなかった野菜を、日本から持ち込んだ種子や日本式栽培法により質・量とも豊富なものにして全国に拡げ、また稲作の改善により、作付面積や収穫量の飛躍的な増加をもたらすなど、ブータン国民の食生活改善に大きな貢献を果たし、これにより平均寿命を延ばしたといわれています。この功績により、最高位の爵位である「ダショー（最高の人）」を贈られました。1992年にブータンで亡くなったときには、国葬で送られました。

現在でも日本は、経済的・人的支援を行っており、この旅行でも日本の技術による和紙工場を見学したり、また国立の美術学校では、人形作りを教えている熟年男性に会ったりしました。

「世界で一番幸福な国」でも、TVやインターネットの普及により海外情報が盛んに入ってくるにつれて、人々の幸福観も変わりつつあるようで、立憲君主である国王にとって、これからが大変な時期だと思えます。人々が「民主主義」という言葉とともに「いざというときには王様が何とかしてくれる」と、よく口にしていましたから。ブータンが何時までも「幸福な国」であることを祈っています。

いきいきライフ 続「再び青春時代」

武田 輝明

定年退職後、63歳で入学した國學院大学を無事に4年間で卒業しました。古事記や日本書紀等の古典を始め神道思想史や宗教学等の講義は私の興味を満たしてくれるとても充実した時間でした。私の選択した神職コースではこれらの講義の他に神社実習がありました。伊勢の神宮実習では1500年以上にわたって毎日、天照大御神はじめ諸神に御食事をたてまつる「日別朝夕大御饗祭（ひごとあさゆうのおおみけさい）」という古式に則った荘厳な祭祀を息を凝らして見学し、日本の伝統の重みを感じました。また、五十鈴川の清流に身を沈めて祓詞を黙唱する「禊行」も体験し、身も心も清められていくのを実感しました。

課外活動として取り組んだ「皇居勤労奉仕」も記憶に残る貴重な体験でした。同級生の有志を募り「皇居勤労奉仕団」を結成し、団長として奉仕活動に参加しました。4日間の奉仕活動の中で天皇・皇后両陛下とお会いする日が一日あり、各団長の前に両陛下がお越しになられて、お話をさせていただきました。生涯忘れ得ない夢のような貴重な体験でした。家族に支えられた4年間の充実した大学生活は正に「再び青春時代」そのものでした。



皇居勤労奉仕の仲間と共に（前列中央が筆者）

卒業後、同級生の多くは神社に奉職しました。全国の神社からの求人案内には年齢制限が明記してあり、私のような高齢者は対象外です。神社に奉職することを目標に國學院大学に入学した訳ではありませんが、神道や神社についての学問や実習をしている内に一度でも神社への奉職が出来れば良いなという夢もいつしか湧いてきました。3年に進級した或る日同級生の一人が「うちの社長（宮司）に会って（みないか）」と声をかけてきました。彼はサラリ

ン時代に神社の宮司の一人娘と結婚したため、勤務先を退職して神職になったと笑っていました。有り難い話なので早速彼の誘いに乗って都内のその神社を訪問しました。「そのような夢があるなら、うちの神社で勉強をしたらどうか。」との宮司のお言葉で翌日から神田神社での実習生活が始まりました。

神社奉仕の一日は境内清掃から始まります。白衣・袴に着替えた後、竹箒で境内を清掃します。清掃後の清浄な境内には清々しさと心の安らぎを感じます。神社にとって“清浄”は“祭祀”と共に最も大切なことです。



神田神社本殿前にて

境内清掃が終わると本殿に正座して朝拝です。朝拝の最後は「敬神生活の綱領」を全員で唱和します。「敬神生活の綱領」の第一は「神の恵みと祖先の恩とに感謝し明き清きまことを以て祭祀にいそしむこと」とあります。これは私の現在の心境と実態そのものを表わしています。三菱電機での40年余の勤務、その後の大学生活、そして神社奉仕、全てが神の恵みであり、両親や家族のお陰であると感謝する毎日です。

正月の初詣を始め、初宮詣や七五三詣等で多くの人々が神社に参拝に来ます。さまざまな悩みや願い事を抱えて神社に参拝する人も多数います。参拝者に安らぎと希望を抱いていただくのが神社の役割の一つです。世のため、人のために少しでも役にたつように心して、一日一日を大切にしながら、神明奉仕に励んでいます。

（注）桜船会だより19号(2007年11月)に、本稿の前篇が掲載されています。

いきいきライフ

トワイライトエクスプレスの旅

玉田 幸吉

私たちの家族は北海道が大好きです。寝台列車に乗れることと、活イカ刺、そのうまさを堪能できるのが一番の理由です。それにラーメンの食べ歩き、これまた楽しみで観光はそのついでにと位置付けています。今回の旅は家族5人、昨年11月中旬に寝台特急トワイライトエクスプレスで北の大地に向かった時のお話です。トワイライトエクスプレスとは大阪札幌間の1,500kmを約22時間かけて日本海沿いを走破する列車のことです。夕暮れと夜明け時の薄明を意味するトワイライトが名前の由来だそうです。寝台列車なのに昼時に発車します。

大阪へは夜行バスで移動しました。早速、大阪城、道頓堀近辺をブラブラして楽しんだ後、トワイライトに乗るため再び大阪駅に戻りました。さすがに車内でのディナー12,000円のフレンチを食べるのは？だったので、夕食用の駅弁を買い込み入線を待ちました。「11時50分発寝台特急トワイライトエクスプレス号札幌行きは10番乗り場から発車します」とのアナウンスが流れてきてからほどなく、ヘッドライトをオレンジに光り輝かせ神戸方面から登場してきた時は気持ちがたかぶり、嬉しさで血圧も上がったような感じがしました。機関車は客車同様深緑カラーで塗装されておりヘッドマークはピンクの下地に白い天使、名前は中央に、下側には暮れなずむ日本海をイメージしたと思われる波が描かれていました。運転席の窓枠は金色で縁どられており、同時に金色の帯が一本締められている様子は映像そのまま感動ものでした。直後は電源専用車です。ここからは9両編成で最後方に展望スイートの1号車が連結されています。4号車は自由にくつろげるサロンカーで流れゆく左右の風景を楽しめるようにと窓は広く作られています。3号車が食堂車で、ランチだけは食べようねと前から決めていました。

ひと通りその姿をビデオに撮り収めてから乗り込めば列車は滑らかに動き出しました。ガタンゴットンが徐々に早まり車体のきしむ音や「いい日旅立ち」のメロデーを耳にした時、旅の始まりにグータッチ。私たちは5号車5番、6番のツイン寝台です。琵琶湖が見えてやっとひと段落、最初の乾杯です。楽しみのランチは普通でしたがビールのうまさには思わずにっこり。オリジナルグッズをめいめい買い求めた後はサロンカーで再度の乾杯。のんびりゆったり気分を味わいながらも、富山湾の夕暮れを



車中にて

目にした時にはまさにトワイライトな時間であり、日没を迎えたようなので酔った私も寝台に戻り早めの眠りにつきました。

ゴオーと聞こえる耳障りな音に目を覚まし覗いたら、青函トンネル内を今までとは逆方向に走行していたのには思わずびっくり。そう言えば青森信号所でこれまでロングランしてきた機関車EF81が切り離され、付け替えられた青函トンネル用の機関車ED79がここから一時的に1号車を牽引するようになると聞きました。つまり進行方向が変わったわけですね。また横になっていると5時15分「ごりょうかく」到着です。ここでは重連DD51のディーゼル機関車にバトンタッチされているはずですが、でも降車できないため付け替えの様子がうかがい知れませんでした。6時ごろ今度は内浦湾からの夜明けの様子です。日の出前の家屋やら電線、手前の道路にはまばらに走る車の姿、まるで影絵を見ているようです。やがて太陽は海面を染めながらバツ印に光の帯を徐々に広げてきました。夜明けはいつでもどこでも美しいですね。朝食はあまった駅弁です。あっという間に時間は過ぎていき、幻想的な朝もやけや有珠山、昭和新山の山々を目にすればまさに北海道だと実感できました。札幌到着前にも「いい日旅立ち」のメロデーが流れていましたが、昨日のことを思えば名残惜しくももっとも乗っていたい気分には駆られました。明日は函館からの北斗星で帰ります。これも寝台列車です。ホテル一泊、車中三泊ときつい計画の旅になりましたが、念願のトワイライトに乗れたので満足できた旅となりました。家族に感謝です。

平成 24 年度 桜船会行事予定

実施時期	行事名称	行事内容	前年度の記録
平成24年4月20日	会報第28号発行	シリーズ「いきいきライフ」 秋の懇親会報告 etc.	H23. 5. 28 会報第26号発行
5月27日	第20回総会、懇親会	総 会：情報総研大会議室 懇親会：事務厚生棟2F	H23. 5. 28(土) 出席者 143名 第19回総会、懇親会
9月下旬	バス旅行	近隣の名所・旧跡などを 日帰りまたは一泊旅行	H23. 9. 27(火) 参加者 61名 東京スカイツリー遠望と 都内庭園めぐり
10月下旬	会報第29号発行 (桜船会発足20周年記念号)	桜船会20年のあゆみ、 会員投稿記事 etc.	H23. 11. 26 会報第27号発行
11月中旬	秋の懇親会 (桜船会発足20周年記念)	旧交を温める宴会	H23. 11. 26(土) 出席者 68名
平成25年3月上旬	春の野外行事・見学会	近郊へのハイキング、諸施設 の訪問見学など	H24. 3. 9(金) 参加者 ?名 横須賀軍港めぐりと 戦艦「三笠」見学
3月下旬	花見会	三菱電機「桜まつり」に参加	H24. 3. ?(?) 参加者 ?名

事務局だより

1. 会員の動向(敬称略) 2012-4-1 現在 315 名

(1) 入会会員 2名

小倉 基一 原 正樹

(2) 退会会員 3名

菅 隆志 須藤 敏夫

(3) 物故会員 2名

鈴木 賢一

2011年6月23日逝去 享年61

鈴木 忠作

2012年1月29日逝去 享年83

宮本 義幸

2012年1月18日逝去 享年85

謹んでご冥福をお祈りいたします。

2. 近隣OB会定期交流会

昨年12月14日に、鎌電楽友会館にて、桜船会(会員数319名)、湘南ダイヤクラブ(会員数325名)及びMPCクラブ(会員数286名)の3OB会の役員が出席し、情報交換を行いました。当会からは、澤野会長、市川副会長、福本幹事が参加しました。

3. 三菱電機ソシオテックウインドオーケストラ 第19回定期演奏会

鎌倉芸術館で1月28日(土)の午後2時からソシオテックウインドオーケストラの第19回定期演奏会が開催されました。桜船会会員の皆様にもご案内しましたが、当日は大勢の聴衆が詰めかけ、素晴らしい演奏に魅了されました。

編集後記

峯尾さんの「王様と握手した話」に出てくる「ブータン建築」は鋭く端が跳ね上がって、搭屋だけを取り出すと未来的/SF 映画的な感じも受けます。この小さな国は民族の歴史と伝統=文化に軸足を置くことを「選択」して「幸福な国」つくりの最中にあるそうですが、この国の農業革新に尽力した日本人がいたことに、誇らしい気分を持たせてもらいました。「選択」と言えば「運命」や「偶然」と言った人間をつくり出す要素の中で、最も意志や計画が必要で困難なことのようには思いますが、農業技術者は過酷な農業支援を選び、「再び青春時代」の武田さんは清らかな日々を選ばれました。

「トワイライトエクスプレスの旅」の玉田さんは、北海道に行くのに22時間かけます。怠け者の私には無理な話ですが、旅は目的地ではなく過程で、人生もまた然りというところでしょうか。

次回発行の「桜船会だより」は「桜船会20周年記念号」となります。会員みなさまからの寄稿をお待ちしております。(藤本)

編集責任者	春原 猛
編集委員	藤本孝信 福田一進
印刷所	(株) トーカイ